

のれん・提灯の製造販売

加藤木大介

かつて魚市場があった築地の町で、のれんや招木（※）に込められた商売繁盛の願いとともに、江戸の文化の灯を受け継ぐ。



かとうぎ だいすけ ●  
1959年生まれ。  
(有)津多屋商店 3代目。  
東京都中央区築地 6-5-5

※店の屋号などを記した木札で、福を招く縁起の良いものとされた



フリーハンドで描かれる滑らかな筆運び

お客がいつぱい  
入るように、と  
縁起をかつぐ

上/木更津市の稲荷町の手拭。全面に木更津の「キ」の字。「荷」の漢字にはキツネが隠れている。こうしたアイデアも加藤木さんが提案し、注文主の希望と擦り合わせていく 下/音楽フェスのTシャツと前掛け



築地の町で三代  
江戸文字を次代に

築地市場跡地に程近い通りに面する「津多屋商店」は、のれん、提灯、旗幕、のぼり、半纏、千社額、手拭などの各種商品を製作・販売している。のれんや手拭は染物店、千社額は木彫職人といった具合に、商品成形にする仕上げは各専門職が担うが、注文主の思いを形にする文字や図案を描くのが店主の加藤木大介さんの仕事だ。

加藤木さんが書く文字は広義には「江戸文字」と呼ばれ、寄席、歌舞伎、相撲などの興行で使われる文字と、提灯、染物、看板など人々の生活に根差した物に使われる文字に大別される。加藤木さんが手がけるのは後者。文字といっても、書道の

ように一筆でさっと書くものではない。大きさや形、デザインに込める意味まで緻密に計算された、それはむしろ絵に近い文字といえるだろう。「江戸文字は太く、隙間なく詰めて書くのが基本。芝居小屋に客がいつぱい入るようにという願いが込められていて、余白は空席を意味する。縁起をかつぐんですよ」と加藤木さんは微笑む。

初代の祖父・泰之介たいのすけさんは茨城県出身。東京・大森の提灯屋で修業して独立し、昭和六年（一九三二）に



「一番難しい字は“心”だね。あとは数字の“一”とか、“山”とか。バランスを考えないといけないから、シンプルな字の方が難しいんだよ」

築地に店を構えた。築地に来たのは、一足先に上京していた兄が魚屋を開いていたためだ。昭和時代の築地は市場を中心に活気にあふれ、魚の卸売業者が寿司屋やスーパーなどの得意先に、のれんや招木を贈る習慣があったことから、津多屋商店には次々と注文が舞い込む。「お前は三代目だよ」と祖父母に言われて育った加藤木さんは、幼い頃から自然と江戸文字に親しみ、中学生の頃にはすでに仕事を手伝っていた。学業を終えると迷うことなく家業の道へ。江戸文字の技術は、店に出入りしていた職人の書いたものや、名手として知られる二代・高橋藤之助の見本帳などを手本にして多くの仕事を受ける中で身につけてきた。「最近のはのれんを掲げる店が少なくなりましたね。昔は夏になると、魚

の仲買が寿司屋に白いのれんをお中元代わりに贈ったものですが、今ではそうした気遣いをする仲買も少なくなりました。業者仲間や寺社に額を奉納する習慣も減り、この二、三〇年で江戸時代から続く文化が失われつつあるのがさびしい」と加藤木さん。それでも、母校・京橋築地小学校の周年記念の手拭の製作や、音楽フェスのTシャツのデザインなどを通じて、江戸文化を次代へとつなぐことに意欲的に取り組んでいる。「先日、晴海に新しくできた地域交流センターでワークショップを開きました。皆さん、自分の名前や屋号を書いていたので、中には、推しの俳優の名前を書く方もいましたね（笑）」と、現代に息づく江戸文化の一場面を、楽しそうに振り返った。